

和刻集

那之部

十九

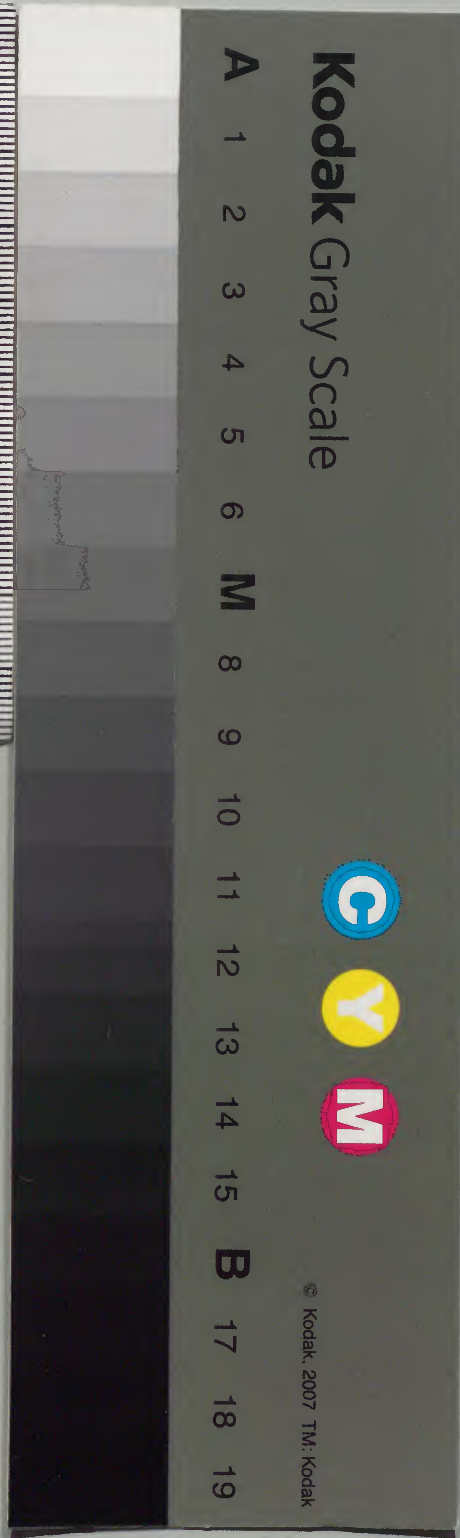
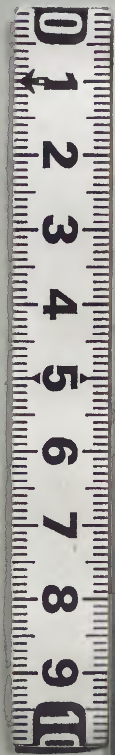
番外書冊

			和書門
	一八四三九	架函號類	
	二二七		
二四			

庫文閣内			
二四	一八四三九	架函號類	和書
二四			
六			

内閣文庫		
番號	和	18439
冊數	24	(18)
函號	263	20

字學韻冊



糊などで貼り付けられている部分がめくれない箇所あり

ふハ階と云々萬葉集にいさむとびてま結びてん君はよりふいハ君よま
ふん也後世ハ多く嘆とる詞ありのけけれらりきふうつりまうれ
の類也云がれ常もかふう〜みつべ〜れのれも同一又ふらふす〜
とふらたどのふハ降去暮去ふとの語末の助辞の如〜とらり又朝ふ〜
よふ〜ふ〜のふハ毎字とつね〜とらり〜似〜らわれふてのふハ去字
のふハ不の字のふ也又色ハ出ふゆめ風より〜とふ〜と〜とふ〜下知
の詞り〜ふハ勿の字ハ兼也真名伊勢物語ハ「諾」字とよめるハ口語に〜あま
ふ〜れハの兼是也西土ハも那を助諾と用わ〜事又〜後漢書に公
是韓伯休那注ハ那ハ餘語聲とあり世説ハも汝欲作沐德信那〜と〜
〜り〇佛足石の秋とせ〜と〜は〜給ひ孫〜と〜如〜〇文字の字と
ふ〜と〜ハ天武記ハ〜と〜り周禮ハ掌書名於四方注ハ古曰名今日字と〜
〜り瑜祇經ハ云那摩是文字也〜ハ梵語も〜と〜也〜〇莫勿〜と〜ハ下
よ〜と〜兼〜り萬葉集ハ莫卷莫恋曾〜と〜ゆ又下〜の辞〜と〜ハ古歌
に多〜常〜ハ逆讀〜と〜を直讀〜と〜ハ例也大日經疏ハ曩無也〜ハ翻

譯名義集 那奈言不〜と〜り俗語不埒不届〜と〜ハ亦同一〇菜ハ可
覺の物ふ〜と〜り〜ハ魏志ハ倭地温暖冬夏食生菜と〜と〜け〜ハ
松也紅毛語このかる〜と〜ら〜ふ〜と〜ハあり〜と〜ハ菰荒野譜ハ水菜と云
え〜り菜種ハ薑薑也油菜と〜と〜〇高野山〜と〜ハ所ハ不時菜と〜自然
生あり大師おせまで絶〜と〜誓ひ〜と〜ハ奇事也〇中〜と〜ハ下略也日本紀
ふ〜ゆ〇魚をよ〜ハ〜ハの略也記録ハ真菜と〜書〜漢〜も魚菜〜と〜つ
つ〜り又住言〜ハ魚供と〜あ〜と〜林〜平安〜と〜鮮〜と〜ハ小魚と〜と〜ハ
〜ハ尾別の方言ハ川魚の〜と〜と〜水〜と〜ハ〜ハ魚と〜日光〜と〜ハ
〜と〜と〜〇京ハ口語の〜と〜ハ加賀越後も同一

△ふあ〜 名兄也古語多く名と〜と〜り万葉集ハ名姉と〜と〜と〜
と〜と〜り
△ふい〜 乃至の音也佛經ハ多〜皆上下ハ挙て中ハ略と〜辞也宋以前ハ
多く至乃ハ他と〜り〇内侍ハ女官也高内侍ハ高階成忠の女貴子也攝政
道隆のかりハ人倭狄ハ能〜文章巧〜と〜南朝辨内侍ハ藤原基隆

俊の女教人也新葉集に及ゆ○内侍所ハ禁中よりあり建曆御記に河院仰
 上内侍所神鏡飛出欲上天而女官懸唐衣袖奉引置依此因縁女官奉守護
 と云々云々也温明殿と称するハ名也漢董公傳の注より御供ハ寛
 平二年より始るより公車根源より御神樂ハ一條院の長保四年より始る○
 内侍宣しつゝ西官記に補藏人頭以下事所別當上卿奉勅以定支給藏人
 了還補或於御前定申仍仰出納以内侍宣旨之と云々太政官に付せ奉藏人
 に付く奏と云々内奏と云々意同し後漢昏をも侍中者内侍也と云々
 云々
 ふいん 源氏に及ゆ内宴也春の内文人を清涼殿にありて詩以似て講せり
 ふふあり保元中二信西行と後絶しり
 ふいん 内辨と云り元日の式より即位以下諸節會に内辨と稱し諸公車に
 ハ上卿と稱し庶事ハ辨備と云名也○第二大臣以下兼明門外に於て庶事
 ハ辨備と云ハ辨と云り
 ふいん 民に及り無が代の義如無の意也俗にふいんといふと云り秦誓に曾

種相オノコシマ 穢と云るも減蔑と同一源氏枕草命に及ゆ衣のちけふと云はる
 ふいん 内教坊と云り大内よりあり女房の学問と云又兼ふと云り今也
 思の傍の日記に内教坊の小さくと廿人の給りといふと踏發の下より今の大内オノコシマ
 ふいん 其の傍と云りといふ唐百官志曰開元二年置教坊於蓬萊宮側と云也
 ふいん 鳴鳥合の義也といふり今物語に云り今ハ賞と云異鳥ハ風
 と云る也

ふいん 勿入側也河内茨田郡諸福村よりあり為尹千首と
 つまふくハ内院沈と云りかろふのそとこの月よりありとの例
 ふいん 朝野群載東鑑より貢と云り天工開物に米穀のふいん乃粒と云衣服
 のちふいん乃服と云る如し○乃米と云り今類聚雜要より西納貢字上林賦
 にも云る
 ふいん 委字と云り万葉集に及ゆと云り○源氏に及ゆ衣徒然草
 にも云る
 ふいん 永正記古老口實傳に及ゆ引置と云り伊勢神宮に及

の名也

△ふさり 原平盛衰記に名折と云ふより名を損する事より也○古事記の歌に潮瀬のふさりと云ふるはふさうに同

ふをつゝ 古事記に着其御名と云ふ

ふさうつむ 前漢程方進傳に埋名と云ふるは白詩龍門原上土埋骨を埋

名と云ふ

△ふら 中をよみ神代紀に内もよみり明と云ふはふらと云ふは○中山に愛宕郡也

夫木集に

君も来と我も往者乃中山のふらと云ふは

○哥の中山に清水寺の南よあり○天武紀に云ふは伊賀の中山に伊賀郡あり

○中第に大同聚類方より此方豊中津古傳村民多兼言上之於朝家也治麻

之奇方也○中川の今の京極川也河海に三條以北号中川六條まで流るは近代事

也後拾遺集に

行末を流く何に頼けむ絶くくもの中川の水

鴨川を東川に桂川を西川と云ふは又奈良の東にあり添上郡に属

を○式美濃國惠奈郡中川神社又大平記にも源満仲中川の盜賊を誅すと

いふ今の中津川あり○仲神社は式伊勢國多氣郡にあり齊宮式に竹中

社とあり神鳳披に中麻績御園といふ今中津川あり○名に良をふらとよ

む護良親王の如し

ふらば 半ばより中端のふらと云ふは○大半は四分二也

小半は四分一也強半は三分二也弱半は三分一也

ふらり 半をよみり中のふら也○半木の社の今中賀茂といふ賀

茂上下の間は在りて也又流木の杜といふ為家郷の牧夫木集より

○半井は京島丸中賣のふらあり和氣氏の故跡也と云ふ板を井内茂

倉とて半井製薬の用と云ふ半井雑用の水と云ふは半井と称を元

尽藏に正四位典藥頭和氣明重永正中人也為施薬院使難髪号宗鑑

半井氏之祖医人割髪従是始と云ふ

ねがら 半字をよむ日本紀に云ふはふらと云ふはあるのふらと云ふは又云ふは万葉集

○古今集第十九短哥と標して載るる所皆長哥なり其の載集より始まるるもあはれ拾芥枚は長哥ハ五七五七五七五七五短哥ハ五七五七五七五と云ふはさし古今集載るる所も此数のこゝろもあはれ詞書は多くたゞうゝと云ふは短歌と標するは古今集より謬をばへるや

九月をいふ長月の衣長月ともいふ拾遺集に衣と長月ともいふ漢もあはれいひけり○夏の日々の衣とりは長月と云ふやせては長月と云ふは春といひ長月と云ふは秋と云ふや

催馬樂なるいひもいふ庭訓往来に仲人といふ訓蒙字會に呼男曰媒人女曰媒女總稱仲人といふ○仲人といふは諺に世範は古人謂周人惡媒以其言語反覆と云ふ古人と云ふは戰國策より蘓代の言也源氏と此言をいふ

日本紀に内應又媒人といふり中よまの衣也新撰字鏡に媒はふりたる日本紀に外衛と對し兵衛といふ公卿補任は大同二年改近衛為石

近衛改中衛為右近衛○宿德の大匠者老の侍讀ふと牛車宣下あはれ中衛に引入しり年中行事致合よ

○神宮第一門第二門之間もすく中衛と稱し或は中重也といふた敷りと中倍上紙十八枚といふ

中臣といふり中つ臣の衣也つら助詔つれ及也纂疏に天兒屋命十世之孫臣按山命始賜中臣姓といふ神と君との中臣といふて宜く奏請のよ也○伊勢東名郡に中臣神社式といふ今市中に春日の社といふ是なる一續日本紀に中臣伊勢連大沢賜姓伊勢臣と云ふり

倭名鉄は長刀の訓なり今長刀といふは鉄也中卷の衣又と柄と齊しく造るる物也元弘建武の比は長大長刀といふ身と柄と五尺餘りの物ありしは此類なり成り武備志に我朝の制は皮條と刀の鞘とつらて此を肩よと云ふ或は手よと云ふもの隨後の用るる是と大制といふと云ふせといふは○信濃高井郡の

地名七卷村あり

ながれき 流人といふとて獄令本犯不應流而特配流者三載以後聽仕とて
えのり拾遺集よ

ふれ本も三年ありて相又てん世のふとてやかつとらり

和泉國泉南郡の村名よもいり

あぐみ 倭名抄よ天一神と訓より中神の金置経よ天一立中央為十二將定吉因え
え陰陽各よ天一遊行方角百事犯向之大凶とて又男女の中とてふ神あり
といえと源氏よふ神をうつてとてとて曆家よ此神四方よ五日は四維り
六日つれて四十四日下土を廻り此とてとて物よ物忌とて此後天よ
よとたまふ間癸巳と始り一戊申と終り一九十六日と天一天上とてふありとて
と通昏大全よ鶴神遊方毎日各有避忌但癸巳日到戊申日鶴神在天无避忌者
とて是也百鬼経よ天女化身やとて

ながり 長橋の川竹とてある禁中長橋をら御殿より南殿(か)り
也とて或長階と書り○勾當内侍と長橋の局と稱するも是也掌侍四人

の内の第一也

ながり 萬葉集よ信濃哥よ中麻奈にうたふる舟とてとて仙覚抄よ河の中
此洲のまふごたるをらとて例をまふとて呼方言よや今佐久郡よまふか
一村高井郡よ間長瀬村ありて俱よ洲よとて今此河中寫の地名ハ東鑑盛衰記よ
中まね轉しと中寫とありとてやとて河中寫の地名ハ東鑑盛衰記よ
又ゆ

ながり 倭名抄よ中務省をかうのまらつてこのはかととてありその略也○

歌人中務ハ敦慶親王の女也

ながり 存命よも長生をもらふ長く世と経るの義也又とて及れ流をよ同一よと
ふつてとながれてとてある事有とて○萬葉集流経事吹風とてある夜の
裔の長くとてをらつて○ふらとて又此とてやとて乙の故新古今集よ歌
よの家集よ三條右大臣いよ中將とてかりりる時をりりるよとて又ゆと
とてはつてのよとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
白氏文集よ東城尋春詩よ老色日上面散情目去心今既不如昔後當不如今

この心也と○父左京大夫頭輔卿也或按上清輔朝臣の飲の弘まを看あふ人
ふーいまこころと及びりと登るまは然とかまふ然め出て尋まの皆とことよ
まさこころさきよる事とことよてねんけりしとまの飲よまんとてハ大率
ハいづれと古書ハてことハて万葉集ハてことハて侍

ふづづ 日本紀上長上と訓より通雅上長上ハ長直不番上也といふ今よりふづづ
也かりの番よ勤しるを分番とも番上ともいふ○職事官長上官といふ事あり
職事官ハそんくよ司る役あり長上官ハ散位の人長く上とて番と海
らる也といふ○續紀ハ橘者菓子之長上人所好といふハ最上といふ如し

ふづき 此世かゝの長と別ハ杜詩ハ已近苦寒月光経長別心とこといふ
續後撰集よ
山鳥のころ尾れかゝりけりての長と別のかけを急はく

○死別はらふ杜詩ハ便與先生應永訣九重泉路尽交期とこといふ草庵
集よ
人の世れふら別は心いふせん雲とこといふ鳥の本より

ふづき 神代紀ハ長鳴鳥と云ゆ難とこといふ也西京雜記より長鳴難ハ別言

あり ぬがれての ありての世也とこといふ也

ふづき 中臣祓の書ハ中臣氏掌る祝詞あるをりて終と古語拾遺

よハ中臣禊詞と云朝野群載よハ中臣祭文と載る延喜式よハ六月
晦日大祓と云せりといハ中臣の祓の詞とこといふこと○此詞ハ天智天
武の比と云とつらん天種子命の作事とこといふ事也○佛の経を
佛の前とこといふ事如くおわく其神の御前と向ひて唱ふるといふこと
賀茂真淵ハいふ

△ふぎ 神代紀ハ諾とよめる音と轉しとこといふ也奈良と諾樂と書る如し○蕩

字とよめるハ沫蕩尊の類也融和の義ありとこといふ事也○倭名鏡ハ水葱と訓より古ハ
よ魯道有蕩の蕩とこといふ事○倭名鏡ハ水葱と訓より古ハ
菜茹とこといふ新猿樂記に腐水葱とこといふ事

菜葱の訓名ありし水葱いふも也。三才圖會に浮菖也と云
 新撰字鏡に菖と云ふは俗に水菖とも云ふ。橘梗も中国九
 州にありしと云ふ。駿河に菖と云ふ。○秋に菖と云ふも。田水
 葱といふも。又田に生く。宇治拾遺に菖と云ふ。催馬樂にもあり。○枕
 草紙に八幡の事書さ。みゆふと云ふ。菖の花乃み。○菖の事書さ。い
 くとみ。○著聞集に成通卿熊野詣て蹴鞠あり。に夢中に菖の葉一
 枚得て。まゆり。あて持し。事と云ふ。保元物語に。まゆり。めれ。王子のたぐ
 の葉と。百度千度。むくんと。まゆり。めれ。と云ふ。夫木集に。熊野の事と云
 める。哥よ。あまの。まゆり。露ふと。まゆり。熊野と。あまの。まゆり。伊弉諾
 尊より。出する。あまの。まゆり。樹よ。かた。と。称する。も。の。也。葉と。カ。葉と。いふ。まゆり。が
 たり。其。葉。水。菖。と。似。する。まゆり。の。まゆり。平家物語に。梅を。いれ。と。竹。栢。也。と
 いて。或。の。柳。と。いふ。二。合。れ。意。本。系。と。あ。ま。の。まゆり。と。菖。菖。と。いふ。又。菖。と。いふ。
 山城宇治郡に菖と云ふ村あり。○菖の神祠に四條壬生あり。那義の
 城に美作國あり。

なげ

菖と云ふ。神代紀に波瀲と云。古事記に波限と書。此の菖也。なげ
 菖と云ふ。菖と云ふ。同韻の轉也。○渚の院伊勢物語に。又。河内交
 野郡の渚村あり。禁野も近。土佐日記に。菖と云ふ。れ。と。いふ。と。に。故
 在原のありし。の中將の菖と云ふ。所也。と云ふ。

あき

神代紀に。哭者。と云ふ。古事記に。哭女。と云ふ。今。と。紀州。くまの。あき
 と云ふ。死人。あき。の。賤。姫。と。備。ひ。て。一。郷。と。哭。て。廻。り。誰。ある。事。と。人。く。よ。昔。知。さ
 して。い。は。す。

あき

眉尖の類菖のか。あまの。菖。の。か。ま。ふ。也。菖。の。菖。ある。と。今。と
 菖。と。云。ふ。と。菖。と。云。ふ。物。あり。其。物。より。出。る。名。成。一。と。い。ふ。武。備。志
 我朝の制。カの大。さ。と。い。て。長。と。柄。の。者。の。權。導。の。用。ふ。石。人。と。殺。し
 つ。と。物。と。い。は。す。是。が。先。導。と。い。は。す。と。云。ふ。物。成。一。と。い。ふ。中。山。傳。信
 録。に。中。山。王。の。儀。仗。と。い。は。す。て。長。釣。と。云。せ。り。今。と。假。家。と。先。導。と。い
 専ら。打。物。と。稱。せ。り。古。今。と。い。は。す。大。將。の。持。つ。物。と。い。は。す。と。云。ふ。物
 あり。文。治。中。奥。州。の。戦。に。和。田。義。盛。と。い。は。す。と。云。ふ。國。衛。と。射。殺。と。島。山

ふぐさのくさしてふぐさみくする例ふくさつて花をよめる梅の俗字也書
ハ西土の俗字也

なぐりー 日本紀の妙美とよめる万葉集に名細と書るより一のもいふこの

海もつらり花がハー香がハーふももらつて後世名は高きと云ふ如く

○味酒鈴鹿郡奈具波志忍山と倭姫世紀に又味酒も奈具波志も枕詞也
忍といふ詞よりて名細といふ式よ忍山神社といふ野村にあり

△ふげー なげのふげなをれ詞ふげのりーふく物よるる無氣のそ也

そのうとふくれ意源氏よふげの清筆づひもといつて等閑乃そといふ

て茂字れ意よもらつるより言今集も暮ふたけの花れかけらといつて暮と

もふく花の蔭乃ふくうんやとちかー意也後撰集よ

言乃葉のふげなりのくひふふふふふたけの君もあつてん

○卑俗の友とよめたふげといつて氣誼相投といふひー

ふげさー 嘆といふり靈異記に嗟新撰字鏡に悒とふげくといふり長息の
系也長大息といふ如くよて嘆息といふ歎息のためいきとほく率也

秋は多く投木よよせり○万葉集に歎くひくといふゆかひ反き也○伊勢物

語に花よあぬなげふらつたれ愁嘆よあつす称嘆乃意也といふる涙と

俗よふげくとおぼへ誤也といつて哀嘆のここのおぼへく和語乃本意と辨へ

ざる説也○又ふげくとおぼへ思ひて長息つくよう神ふくは深く願ふ意よ

も一轉りの俗語よ此意よ口語に願ふ事とも今いふ伊勢物語よふ代りといふ

人乃子のふとといふと真名本の齋と書ていふよういふとよふくや

と言今集よふくといふるを此意也○投木の焼木といふ後撰集よ

あふぶふとあふふとあふふとあふふとあふふとあふふとあふふとあふふと

初投木斧の三小寄る也○萬葉集に氣長くといふる秋多し同意也伊勢

物語真名本に難心をふくといふり難の歎字よや○ふぶの杜の大隅

に在といふ

はらと幸とこの受もん社とていふなけこの社とあつて

是神とて願を可受とあら事といふ○嘆けねあるおのといふ歎け情

吟日記に十月晦の三夜あつてそるぬ時あり二三日ありありと晚と

かぶり 波残るる万葉集に難波と陸干のふらりと潮より出る詞
ふるりしと何事もまをりを惜むかゝるの轉しる也さるハ名残とあるも
あゝかゝる〇餘波とよむハ長恨歌傳よりくるもハ九傳不出る〇惟馬
樂に風もふいふれいふらうもくくせむといつり扱ふたゞりハ凡の名あり
かぶりも同一と云ふらう新千載集ハ

吹くふあふの風と雲とてふどのとくくる有明の月

たごらう 萬葉集ハ沖のふらりとあり波あはく風あちくハほのろき波
らうらうらうらう海の汐乃う干る時海の底ハ波の凝るる如くてあ
るをらう今の予とらうらう是也故ハ餘波の字ふらうと訓らうたゞり同一今
海辺の人波の音のさうとふらうらうらう伊せと乃波のふらうのいづらう
とあると云ふ本ハ波取盧と云ふらうらうらうらう神代紀其牙鋒瀝之
潮凝成一萬名之曰破取盧嶋と云ふらうらう元真家集ハ

伊勢の海乃蟹の初舟長凡ふらうらうと云ふらうらうらう

〇土丸よて山の中よらうらう長閑ふる意と云

△ふさ 但馬ハ奈佐氏あり下総ハ口語のさふさといふ

ふさけ 情とらふ真名伊勢物語ハ又中裂の香中心のさけあるをらうて心根
ともよむ情實也伊勢物語ハ心ふさけと云ふらう此國ハはらけてふさけと云ふ
と貴つらやらうたゞけある人ふさけと云ふらうの詞味と云

あゝれやうらう時つらふもふ人乃情ハ世ハありと云

漢書ハ財交者密財盡而疎徒然草ハ男女の情ハとて逢えるといふらうハ逢とて
止よらうと云ふらういあゝる矣とかゝら長と夜を独あり遠く雲おと思ひやう
はらう者よむらうと云ふらう色好むらういあゝと云ふ新古今集ハ

花の小露のふさやいやくと云ふらうらうらうらうらう

△ふら 無とらうらうのふらうらう有の反ふるといふ不有也と注さる靡も罔も亡
も末も蔑もよみら母莫も無と做て看あり揚子法言ハ曼もよみら波とよむハ俗語也〇
梨派訓せるハ奈子ハ音と誤用うらうらう中裂の香と云ふらうらう警梨郡と倭名録と
いふふと云ふらう〇水うらハ消梨也又青ふらうらう共賞と云ふ観音寺松尾と云
よらうら堅ふらハ棠梨也と云ふらうらうらうらうらう加多梨也又嶋と云ふらう實

少く赤し日本紀の木梨あり今と一種しと本草類聚の名より今も橘州
 には紫花梨あり本草より白美濃山中に姫ありあり形圓くてちひさしき玉
 子食し○新撰六帖に夏梨あり秋をとりてぬしよるし其の夏より熟する
 西陽雜俎に曹州出夏梨と云ふ○伊勢飯野郡に一株の言木ありて
 梨に似たり山ふりて一實と梨とをかくて小也云々ぬいひて
 叡山の西坂に不實の柿ある事元亨秋香より云○枕草子に之のむせよと
 云ふしと云ふを嫁聚ふと此村の樹下以避て通行せずと云ふ枝葉甚
 なる云々といふ和漢風俗の異あり其好尚なるをまてかりき
 ふぶぶ 詰字とよみり神代紀より新撰字鏡よりふせると云ふ信鞠と
 ひふせるとよみり何と云ふ詞ありて靈異記に諸見と云ふふぶぶとよ
 り
 ふぶぶ 熟する意割深の事也たしまぬ人と生客といひふぶぶとよ
 客といふ

なつもの 醃といふ鮭鱈も同一魚塩物の事也といふ新撰字鏡に鮭鱈
 を魚のこしといふ今もこしと云ふといふ
 かりるす 令に署といふり名と記と也連署に今も連判也位署に官位
 姓名と云ふ也

△たると 生成化作造為ふとをよみり名より出する詞あり又其人謂
 作日做とも云ふ○子とをふと云ふ神代紀に汝所生児と云ふ
 古事記に生成万葉集に父母成のまに竹取物語にふせぬふせ
 ごとといふ○古事記に鳴とよみり琴と弾ふと笛と吹ふとカと皆此
 意より云ふ也○物と信て沸と云ふと云ふ字書に濟成也と云ふ
 と曲禮の疑事勿質も成也と注し○神代紀に如字と云ふと云ふりうげと
 さつふんの教是也万葉集にも多くよみり古語也○古事記にふと云ふのふと
 といふと云ふ万葉集に汝と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
 也○奈須浦に伊豆國あり○那須野に下野國あり頼朝公に獵と云ふ
 つと那須國造の碑に湯津上村と云ふ所あり高さ三尺三寸幅九寸碑文九八行

あり一行十九字あり都て文字一百七十二字あり白痴不分明の古事記の哥といひふきんととえゆ寐者將宿也下の炊よいとふせともいふ万葉集に枕と巻てふせる尺かもとえゆたせり寐る也又やまといふふぬの安寐一不令宿也又入來てふと寐又ふまらぬ妹と又安寐一不令宿又安宿勿令寝とえゆぬてふ言ひふぬ寐通して活用するあり

△ふせ 神代紀に夫君尊又夫君とふせのみいふあり名兄のふらふら一式の祝詞に名妹万葉集に名兄の君とあり○古事記に袁神命御兄と指て汝兄と詔ひ神代紀に吾弟とあがふせとよみあり古事記に我那勢命とみゆねのいろせの條よて考へ○俗に何の意もあらふとせと通音也古事物よふせうともいふあり

△ふぞ ちふぶの略也あやしとごめふる辞炊ふ思りやふるまゝとやふそともちふぶもかくともいふあり○あふしととらふよ同いふ皆こらふく嘆とる意あり何の昌也實也悪也と注せし如し
ふぞや 何耶の義今ふぞやとらふ

かぞく 謎辞のいふ何の義也拾遺集よふぞくかぞくといふあり又枕草紙よふぞくはとせをいふるともいふありとの故合とらふまもありといつふぞくは解は商謎といふあり

かぞらふ 擬又準のいふありふみとらふつらふの義也新撰字鏡に借をかぞらふといふあり真名伊勢物語よの諷をいふあり○庭訓よ準縮準布とあるに縮布よ準して錢と納りいふあり
かぞらぬく 伊勢物語の炊よえゆ無准の義比類せも高車比分らふく平等ある意ありとらふ万葉集よ花よふぞくてもいふあり又燈と月夜よふぞくとえゆ並添る也

かぞらうた 古今集の序よえゆ比の体也といふ彼よふぞくして此とあり
かぞる也
△ふく 日本紀に鈔字はよりの薙断の義あり大神官式に鈔儀式帳あり奈太作り字彙に鈔平木器といふあり全泚兵制録に小弁と記せり○那多城に加賀國也富樫介の居る處也○新撰字鏡に鈔とあつくとよみあり

蝦夷の録記ふくむ斧とらうらうら

洋といふ仙覚説は波高の義といふと神代紀より名門の轉せり

ふぐり 灘字といふあり ○伊勢物語ふぐりの塩やまといふるいずの

ふぐり也此所より出る舟とふぐり舟といふりい塩漬のふぐり大船のふぐり

ふぐり也此名のこせり廣田乃秋合

詠 天津雲かたが舟のこけゆくはあはきさとのと

○壬生の忠見の幼名とふぐりといふる袋草紙より

ふぐり 神代紀の宥字といふ又宥字といふる宥とふぐりといふる互む也

らうらうら 意成 宥免の字北史より

ふぐり 中臣後よりふぐり万葉集よりある雪とそゆ長密の義成

平記より雪類はふぐりといふる雪訓也雪たふぐりといふる

ふぐり 朽といふるたふぐり此意也源氏の秋日本紀と引て平字といふ是と

所見ふぐり心めくたふぐりたる人といふる ○童水ふぐり秋の五文字の

ふぐりふぐりといふる古き語也

ふぐり 名をたてるは後撰集より名を宿原氏よりある春あはきさとの

○名をたてるはと同一

△ふち 紀の熊野の地那智あり社記に難地といふ一説は後の新宮本宮

より後ふる意なりといふ ○ふちとらうらふち那智の濱辺にあり試金石或は

基石也試金石といふは

△ふつ 復たふ熱の義也とも成の義也ともいふ一説は成法の義稲より

の名也

ふづ 撫字といふ日本紀に摩字ともいふるいづといふるいづといふる

是詞ふちと撫といふる

ふづ 倭名抄に腦といふる古事記にふづ田といふる秋ふづといふる田

より地名成り ○枕家に祈願の時腦といふるて芥子に入香のけりより

ふづ さいふま

ふづ 薺はよりの菘菜の義をすは意成 新撰字鏡に甘ふづといふる

又薺はふづといふるは得る ○倭名抄に葶藶をいふるかたがら訓

せりはハ草の義也俗ハ犬多クハハ西江よと為齊ハハア又ハ
向の義也管子の注ハ陰陽之分定於吉則有甘草生薺是也定於凶則苦
草生薺薺是也ト云々○おやをけぬハ薺薺也大薺の名本草ハ云々
俗ハ残ト云々又ト云々ハ江戶ハ云々草又云々ハ云々ハ云々ハ
云々ハ云々

ふづむ 万葉集ハ煩ト云々常に泥滞ト云々万葉集ハ父母ハ云々知子故三宅道乃
夏野草手菜積來鴨ト云々此文字の義也古事記ハ云々ハ仁德紀の秋
ハ難波人鈴舟ト云々腰ふづト云々源氏ハ云々ハ云々ハ云々ハ煩
字の意ハ云々○古事記の哥ハ云々ハ云々ハ云々ハ云々ハ云々ハ
ふづむハ集夏草ト云々腰ハ云々ハ云々ハ云々ハ云々ハ云々ハ
海水の行夏草薺雪ハ腰ハ云々ハ云々ハ云々ハ云々ハ云々ハ
古事記ハ踏ふづト云々ハ云々ハ云々ハ云々ハ云々ハ云々ハ
ハ云々ハ云々○俗ハ云々ハ云々ハ云々ハ云々ハ云々ハ云々ハ
云々ハ云々 遊仙窟ハ妙婢ト云々ハ文選ハ婢媛ト云々ハ源氏ハ花の云々ハ

ふづむ 台事記の故ハ云々ハ云々ハ云々ハ云々ハ云々ハ云々ハ
もねよハ云々ハ鴨ト云々ハ云々ハ云々ハ云々ハ云々ハ云々ハ
ぬハ云々ハ云々ハ云々○源氏ハ云々ハ云々ハ云々ハ云々ハ云々ハ
ハ馴むト云々ハ意也神樂哥ハ云々ハ云々ハ云々ハ云々ハ云々ハ
らハ云々ハ云々ハ云々ハ云々ハ云々ハ云々ハ云々ハ云々ハ

なるまゝ 萬葉集ハ夏麻引ト云々ハ六月ハ收て皮ト云々ハ云々ハ云々ハ
とつげハ云々ハ所製の義也ト云々ハ麻ト云々ハ云々ハ云々ハ云々ハ
ト云々ハ云々ハ云々ハ又夏麻引命歸野ト云々ハ云々ハ云々ハ云々ハ
日本紀ハ云々ハ云々ハ意也野ハ云々ハ云々ハ云々ハ云々ハ云々ハ
頭ト云々ハ云々ハ云々ハ云々ハ云々ハ云々ハ云々ハ云々ハ云々ハ

ふづむ 白氏文集の随分ト云々ハ云々ハ朗詠ハ云々ハ云々ハ云々ハ
物語ハ云々ハ云々ハ随分ト填ハ云々ハ云々ハ云々ハ云々ハ云々ハ

とりて世俗用來身と採用するも仰也と云う七種はふづれと云うせりあやふ
いざなうともあらはれけのど是河海抄公事根源ふとの説也歌林雜木抄も

せらふつれ御形田平子佛のさそれす〜りこれとせ〜

と云ふも〜即甚也或説は田平子と佛の座の二物也又かり〜けふ〜り〜り〜り
囊抄の效も

とらたつふ五行たり〜佛の座あり〜れみ〜り〜り〜り〜り〜り七種

と〜り〜りあり〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り
茂社七首も

り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り

○攝津國菟原郡中尾村の人生田此濱とて若菜と採て京に献る七種のり
是と生田乃若菜と号し攝津志は澗蔬と〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り
草へ七見村より奉る齋官田蹟の北也式多氣郡奈々美神社は七真草此略
りや万葉七相管〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り
度家々植門打戸滅燈燭禳之〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り

唐土の鳥とらふは是と指也○七種の粥は延喜式水司式正月十五日供御七種粥
料米粟黍子萱子稗子胡麻子小豆〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り
て禪子皇子胡麻子ふ〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り
十五日粥と食ふ事ハ十節録も〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り
即花藤袴朝貞也と〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り
雅世

とらりあひて秋まう野人の七草も〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り

秋の野も〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り
一説は梨挑大豆角豆熟豆加子薄饅也〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り

万葉集も〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り
の略也一説は相と〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り
ふい詩の終日七襄の意も〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り

あつこの〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り
七弦琴也東舞の效もあつこのやつは〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り

は甚字又甚發什麼とよむも非同し顔師古り説し何等物とらふと者役め
く等物と一等の轉音丁兒反ふるより根本と詳しその底字は佐ふ非
ありしとてふふせんも同意也ふふきほもいさぬやとてふ將字
意あり社詩は晚漏鷺浴底心性應璩百一詩に用等稱亦字○万葉集に
何の意は名呼ともなり

ふふも 日本紀に妹まはは妹と訓たりふたしとてふの發也の友ふ也

ふふが 何某の發也何々ぬは略源氏ふふがうらぶとてふとてふ何

それらふ詞の意也又ふふがは洗ふよりぬのうけちふがは念佛をよがはは
都ともえり又自稱もとらふ

ふふと 何れれ也ふんとのまよふあふの後の字ぬらうとて建武年中行事に

はまふよそのものごとく云ふとてふ○古今集に

命やまふとて露のあまおはらふとてふとてふとてふとてふとてふとてふ

ふふれ 何是とらふの轉語成一源氏にたよのみここれの源氏とてふとて

たよとら 源氏にまて難波津とたよとてふとてふとてふとてふとてふとてふとてふ

紙ふふいりりれぬかぬもまよまてふてまてとてふは古今集は序ふふ
とての言れまともまよふ人乃ははあおもまらうとてふとてふとてふとてふとてふ
とてふとてふとてふ

ふふあふ 菅家万葉集に名西負とてふの助辭也名よ負とてふまの

万葉集に名も負とてふ日本紀古事記万葉集等と多くてふとてふとてふとてふ

ふふもえり

たよあふす 俗に何とてふとてふとてふ意又何とてふとてふとてふとてふとてふ

得一

△ふぬし 東鑑に小草并名主紀六久重とてふとてふ名田とてふとてふとてふとてふ
也今と坊正里正とてふとてふとてふとてふとてふとてふとてふとてふとてふとてふ
く軍役とてふとてふとてふとてふとてふとてふとてふとてふとてふとてふとてふとてふ
新様樂記数町戸主大名田堵とてふとてふとてふとてふとてふとてふとてふとてふとてふとてふ
よとてふとてふとてふとてふとてふとてふとてふとてふとてふとてふとてふとてふとてふとてふとてふ

たあふ 七日とてふとてふの轉也○神社に七日參詣の事七夜詣の下ふとてふ

より○誕生より七夜しるし追福の七夜しるしより一政山公の説也拾遺集より
うやの七夜しるしより○針灸薬治及温泉の浴するも七日と一廻しとて
我邦の法あるなり○七列とてありしは後俗の志も也古書よりありしは
よしむつ一万葉集一年より七夕の相人とも今の七夕を候せぬかとも
えより七月七日の夜より七列と呼ん重云其例の如し○思の終の日記より七
首の詩七百首の秋七調子の管絃七十曲の連句七十曲の連歌七百の数のまじり七歌の
御酒也とてあり○凶事より七を用ふる鎮火祭詞より石隠坐且夜七夜昼七日とて
ゆ千一疏の説の如し○万葉集より久あふ今七日はより早し今二日詩とて
又ちくあふ今あつうのまよとてあふあぬれ月とて数の字より三以上七
以下と釈せし如くありや

△なほ 日本紀よりあねの古語也又あねはあともあり万葉
集より名跡とあり又妹名根ともありより其妹はいつれとも
あねと呼ん古の通称あり古事記より那泥命ともいふ神沼河耳命
御兄と指すともいふ兄とも称せし也

△あけり 日本紀より撰又言より實名とて名と告る名也名告の字古事記より
ゆあけりと体より也源氏よりあけりといふとて新千載集より
九重やちりけちりけまといふてあけりといふは又あり

この時よりいふの本也○堂上より禁裡一献上の目錄より稱別官位あり實名とて
いと書也下の二字は假名書也下け私の時も同じ○古男女たていふ相違の時
ありては安よ名のりやぬ事とてより万葉集よりいふとありけりや
りていふ雄略天皇もいふ名のはれとていふとあり○月よりいふの名
のりともいふい我名とていふ故也といふ

なほりとも 元恭紀より委くといふ万葉集より莫言操とていふ正義あり
一後拾遺集より
いふよりいふ人いふあまといふあまといふをたがひといふとあり
漢語校より神馬草とていふ莫騎の系也大唐俗語要略より他馬莫騎といふ
本朝式より莫鳴菜といふと倭名抄より源重之
ちとていふ出るの宮乃神の駒いふのりともいふといふ

ふびて 万葉集と並とある菅家万葉集も推鍋而く去るまづ假言の引

くるめて也或一切とある

ふぐ 倭名欽と蹇とある足とふくは史記に詳為足疾と云ふ委と假字

ちまう混とふく手跋も同一

△ちまふ 猶字尚字の既字と反對せる意也仍いりてね意也此もまた又やうく

しふ意ふも用う上世より源氏物語の比よりいふことなる也久くは月のみ

秋の猶とよめるの猶へ似せし注と如く又いりてね意ふも秋を後の事

いりて言歌と云ふこととて猶と還也と注せし意もあり又儀禮の注に猶者有

致之辞と云ふ俗語とていふ意ありあつ後世の成と書て万葉集等

の言書に例ふ○むと同一傳燈録に如湯消氷尤別有氷と云ふ猶の異体

とて文章に猶尚とも尚猶とも用ゆる○万葉集に黙然不有と云ふあ

れとよめる源氏にも此詞あり又たふもあつ又たふと直人ともいり又同集

に猶哉ともいり拾遺集に

ふくふくふくふくふくふくふくふくふくふくふくふくふくふくふくふく

伊勢物語にたふふやあつとていふ詞もいり真名本に直哉とあり只この
あるとてまふの意あり猶と可止之辞と注するに近し又色このの秋の直
やありけるは秋といふあつ○あやのふの直とよめるはひてトに分るこ
万葉集あしとていふ古今集の今本に秋の行ていふつあるは後書註とる
也古本にも家集とて此秋秋実とていふあは後世の誤とていふよく誤
まるといふ

ふやー 直字とよめる猶と衣通つてそ猶とふやーともいり神

代紀にゆ○直衣の倭名技と欄衫ふやーのころもとるは裁縫

の制もりて位袍の如く直華族乃公卿といふもあつとてゆりて近代

先例よりりて勅許あつ無欄直衣も物と云ふは常よりふのやーは

音の如く天子に直衣の小葵中納言宰相等八咫蝶中將女將ハ元文皆内衣

也といり又小直衣あり狩衣直衣ともいり源氏にさくられはの綺の御

ふやーとていり○引直衣ハ天子藝の御服也といり禁秘抄に有帶昔ハ

只引直と云ふは御直衣御張袴着御と引直衣といふ冬者白淨

なまじり

怒字とあり生強の義あり一乃架集と奈麻強とあるは傳注
よ心不欲自強之辞と見えしは俚語のせめての意也

なまめく

遊仙窟の婀娜囊抄の窈窕とあり真名伊勢物語の媚字又姓
字囁字とあり字書は華同社とあり囁言若不出言とあり艶媚と含むよ
アチり生めくは義也拾遺集一

あもれく舟もかよぬこの舟よいづくありのちあまうと

尼の媚めくと海人の生和布列よひのあもる也かる及く也男女を通しはつ物
と見えきり

と見えきり

△ふみ

並列とあり雙とあり日本紀靈異記と見え相とあり倭名抄御名よ
ろそり貫之集よありたりとありふみびねく也○次とあり年次月次日
次の類並の義也○波浪とあり鳴水の義あり一よそきりともありとあり
静とありと波ふくともあり○坂波打とありまあり逆波とあり○日光
の波とありと金波とあり○浪の花とありと波の雪とありと波の氷とあり○氷
やめくは清くみけの論也○名と秘とあり橘秘樹あり

なまじり

神代紀の浪穂とあり乃架集よありのたのしきあり神武紀の浪穂
と見えしは浪花といつる如し

なまじり

涙とあり泣水箇の義も新撰字鏡に涙とありとあり今
もみんごともあり乃架集よ恋水とあり○涙の玉涙の雨涙の涙の滝
といつるは辞也涙の浦は古方よとあり古今よ涙の床とあり少樂天詩より
夜涙似真珠雙々墮明月とも見えしは伊勢物語よ

我世とありあまうとありひのあまうは涙といつる高き

又ふみとれ涙は日向國とあり

ふるふるく泪の涙とあり雪のあけひは泣て清めとあり

○泪の字彙と典涙同と見えしは○ふみと川の詩も涙川と作る世説よ
も涙如傾河注海とあり藤原惟方の長門の経宗の阿波の流るれ一経宗
の赦されて還す惟方のさもふりりれいよあり
世世も呪むときけの涙川流るるもめく袖の那
よそ又召還されぬ又伊勢一志郡とあり後撰集よ男のいせとありけ

ふん ぶん反ぬ也いふん往ぬ也きふん来ぬ也て同意は落る和語の妙
 ありされ往ぬ来ぬも現在の辞いふんきふん將來の辞將往將來の意
 也神代紀に將隱去とかくとふんよめるわく心得たりかくとぬらんも
 ぬらん反ふととぬらん隱去とあふんの意也又ふんの下よええり古
 今集に序よ人麻呂ふんくくしの秋とふん時よあつるとふんくくしの花やまふ
 ん雪や浦ふんのおの体の辞さかんとえんの系也文ゆく欲吸歎消とよひて末とゆひて
 らふ辞ありてよるんてりらんあとの三の過去現在未來の差別ありて過去と疑ふ
 の辞らん現在と疑ふの辞ふん未來とかけらふ詞也とつり○新古今集よ
 やかたしもまひりえふん春日野まきまはれ目よまかせたふん
 上のふんいりえりであふん也下のたふんいまかせくあふんてりふ詞てあ反た也
 よく希ふ詞も下知るる辞も又ゆふれんあり及ふえぬまき埋まふんは
 えり心つけふんの教是也又
 りふつての河ふいあせふんもぬくたりてふん
 是も上句下句とらふんてりて願ふ意のふん也たふんてりて辞等も平

ふ成ふんもたくれのまがたぬとええふんも同いあせぬとえぬとい
 ふ意同音あれいふい又ふんてりて重なるふんてりて菅家萬葉よ年
 の内皆春ふんてりてふん又六帖よとて草種のかとて果ふんてりて
 へり又
 是も上下とも結句よふんてりて置てまどりけりてりてのあり
 ふんぢ 汝乃而爾若戎とよめる名持の系あふんてりて大汝も大名持と
 も書るよと知つて汝通てて女よ作る左傳よ爾有乱心无厭國不汝堪專
 伐伯有而罪一也とてゆ三字の諸意考知つて若ハ史記よんえ戎ハ詩經
 よ多し
 たりや 那何馬渠胡遐益安寧詎烏奚庸ふんとよめる日本紀よ誰字も
 ふうりふあその系也寧り胡也と注せり詎も渠も同てりて未知の詞也と
 注も盡い何不の合音とてあふんてりて再讀り俗語ハ皆那字と用り
 くらり庸詎寧渠何渠ふんてりて二字とてりて用わるともふんてりて

たよひやう 婀娜の意也ふりあかしくも同じあつたうももろもろ

△ふらう 奈良と日本紀は平とつるえりて平城もいづる也あつたよ乃名よ

あふもくもろも平城の宮とさうてりせる也寧樂とていふ寧具音よや

うよや反也諾樂とていふ韻會は諾囊入声とていふあつたあきも

いふ意也諾樂ハ唐書よ出りて靈異記よ諾磔もいふ○奈良七代

といふ元明帝とて光仁帝に至るまゝといふ○類聚雜要五節祿

法よ奈良良三人といふ○奈良の御社よ源俊頼朝臣

新さ事あつた御社とていふはたやよく口はつた也

賀茂の撰社のなつたやあつたの小川の夕ぐれへの秋ハ新勅撰集よ寛

嘉元年女御入内屏風よとて大なりは川風よとてあつたあつたあつた

うららとて夕ぐれよとていふは夕ぐれとていふは夕ぐれとていふは

ちせとてあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

也古体ある物とていふは詞とていふは詞とていふは詞とていふは

ちせとてあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

御後とるなつた小川の川風ハ新とていふは下とていふは

後拾遺集よ

△山のふりとのあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

是とていふは成つた小川の山城葛野郡よあり家隆卿父壬生申納

言光隆卿子也遠島御抄よ家隆卿若かりて付いといふは

建久の比より殊よ名譽出来よりてあつたあつたあつたあつたあつた

りん秋よはとていふは時よあつたあつたあつたあつたあつたあつた

西行あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

紀和名鈔よ櫛を訓せり新撰字鏡よ柝又推又櫛をよみ万葉集よハ櫛

櫛ふといふは櫛を訓せり新撰字鏡よ柝又推又櫛をよみ万葉集よハ櫛

いふは櫛を訓せり新撰字鏡よ柝又推又櫛をよみ万葉集よハ櫛

よのありあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

ゆ名也又いふは

今平は今も平準とたつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたつと 物なりたるもの物にけりぬらふ意也不あ反也あつたつと

万葉集のつとつとあつたつとあつたつとあつたつとあつたつとあつたつと

名目と名目古今集の紅葉のつとつとあつたつとあつたつとあつたつと

あつたつとあつたつとあつたつとあつたつとあつたつとあつたつと

時奈良の八重櫻のつとつとあつたつとあつたつとあつたつとあつたつと

て秋のあつたつとあつたつとあつたつとあつたつとあつたつとあつたつと

あつたつとあつたつとあつたつとあつたつとあつたつとあつたつと

拾遺集

折てあつたつとあつたつとあつたつとあつたつとあつたつとあつたつと

後拾遺集

初まつたつとあつたつとあつたつとあつたつとあつたつとあつたつと

あつたつとあつたつとあつたつとあつたつとあつたつとあつたつと

あつたつとあつたつとあつたつとあつたつとあつたつとあつたつと

あつたつとあつたつとあつたつとあつたつとあつたつとあつたつと

あつたつとあつたつとあつたつとあつたつとあつたつとあつたつと

あつたつとあつたつとあつたつとあつたつとあつたつとあつたつと

あつたつとあつたつとあつたつとあつたつとあつたつとあつたつと

あつたつとあつたつとあつたつとあつたつとあつたつとあつたつと

あつたつとあつたつとあつたつとあつたつとあつたつとあつたつと

あつたつとあつたつとあつたつとあつたつとあつたつとあつたつと

あつたつとあつたつとあつたつとあつたつとあつたつとあつたつと

あつたつとあつたつとあつたつとあつたつとあつたつとあつたつと

あつたつとあつたつとあつたつとあつたつとあつたつとあつたつと

あつたつとあつたつとあつたつとあつたつとあつたつとあつたつと

あつたつとあつたつとあつたつとあつたつとあつたつとあつたつと

あつたつとあつたつとあつたつとあつたつとあつたつとあつたつと

あつたつとあつたつとあつたつとあつたつとあつたつとあつたつと

あつたつとあつたつとあつたつとあつたつとあつたつとあつたつと

あつたつとあつたつとあつたつとあつたつとあつたつとあつたつと

あつたつとあつたつとあつたつとあつたつとあつたつとあつたつと

あつたつとあつたつとあつたつとあつたつとあつたつとあつたつと

あつたつとあつたつとあつたつとあつたつとあつたつとあつたつと

あつたつとあつたつとあつたつとあつたつとあつたつとあつたつと

あつたつとあつたつとあつたつとあつたつとあつたつとあつたつと

あつたつとあつたつとあつたつとあつたつとあつたつとあつたつと

の意漏逸勢あり○癩病と俗よりいへる病の體といふ也

ありあり 凡てありありといふ詞の款をも文をも上よそのことわらふ公奉て

そせら此系よく有りたりと解せる所なり也

ありあり 万葉集源氏より日本紀の生業又農とあり遊仙窟の家業と

み霊異記の産業とありそひの助の辞福とひ禍とひの如し

ありあり 日本紀の別業田宅等とあり産業の處也田家とも訓あり

ありあり 日本紀の生又化生とあり生出とも又ゆ今も東人の草木の生と

ありあり 伊勢物語よりみんさぐんといふ是ありて真名本は將生と

填もつと○登祚とあり成出の系今ありあがるといふ如し大和物語に我

身れえあり出ぬまとおもひたすいと又そより俊成也

四方の海とそこのけしと汲やせん付とや我ありありもあつと

日本紀意宴の和歌

狼と枝けく後や大津又うは草よりありありあり

ありあり 成出は対する言也砂石集は伊勢国の夫とていふとてこの國は馬

上より物しりり

花あり折て人の向つとさなりとありありありあり

ありあり 伊勢物語の款よりありありありありありありありありありあり

致の後撰集に上毛野峯雄の款より終の夕月と原をいとを六帖

大うといふ事とそらう成ありありありありありありありありありあり

ありあり 古今集序よりありありありありありありありありありあり

ありあり 詞よりありありありありありありありありありありありありありあり

有哉とせせり詳略の異也又古今集よりありありありありありありありありありあり

句調の助辞也といふ○神代紀に具又生成とありありありありありありありありありあり

鳴とありあり音声れ物より是也全術兵制の响と譯あり○万葉集に織を

よありありあれ垢つとたる意ありあり○皮つとれ棒の如き材と俗よりありありありあり

成乃ありあり

ありあり 馴とありあり習のそらありありありありありありありありありあり

如自然といふ一ありありありありありありありありありあり

倭訓栞前編十九終

△ふむし 儼追の系也尾張國國府の社ふむしと云ふ遠江國淡路國王

神社と云ふと云ふありし事ふくふた(祭とらひし)と云ふと云ふと云ふと云ふ
正月十三日の夜旅人を捉(土餅)を負せし逐ふ也芽もて小人形河作つて
儼ハ撃つ妙ハ小形と称も別々大形はつて儼ハ負も也元身釈各よ
筑紫觀音寺よ正月上旬行人を捉く駈儼と云ふよりハ又云ハ浮屠
修正ニヤの法ニヤよりハ神事と心得るハ非也鬼妻の條考ハ看ハ

倭訓栞前編十九終

